



## 四国防災八十八話

### 第四十話 弟のおかげ

監修・著作：愛媛大学防災情報研究センター

作画：十亀 梓沙（愛媛大学美術研究会）

**これは、昭和21年、昭和南海地震の際に、私達一家が体験した話です。**

**私達は、高知県土佐市に住んでいました。**

**ガタ ガタ ガタ ガタッ……………！！**

**12月のある日、突然激しい揺れに襲われました。家の前の空き地へ飛び出し、家族で身を寄せ合って揺れが治まるのを待ちました。**



長かった揺れもようやく治まり、  
私達は家の中に戻りました。

私と母が、ホッと一息ついていると、  
弟が焦った様子で、

“地震の後には、津波が来る！  
早く逃げんと危ない！！”

と言ったのです。



当時、私も母も、  
津波への危機意識は低く、

“まあ、どうしましょう”

“大変だわ”

と、とまどい、オロオロするだけでした。



そうしている間に、  
弟は、行李を持ってきて、

“早く、この中に大事な物を入れて。  
準備して！！”

と急かします。

一方、私達は、

“何を入れたら、いいのかしら？”

“これは、持って行った方がいい？”

と、ただ、右往左往するばかりでした。



見かねた弟は、

“もう、いいよ。  
とにかく、早く家を出よう！  
高い所に行かないと危ないんだから！”

と言い、結局、私達は  
着の身着のままで、  
近くの山へ向かいました。



**山の集会所への避難は、私達が一番でした。**

**しばらくすると、  
近所の人たちが続々と避難してきます。**

**皆、大慌てで家を出たらしく、  
私達と同様着の身着のままです。**

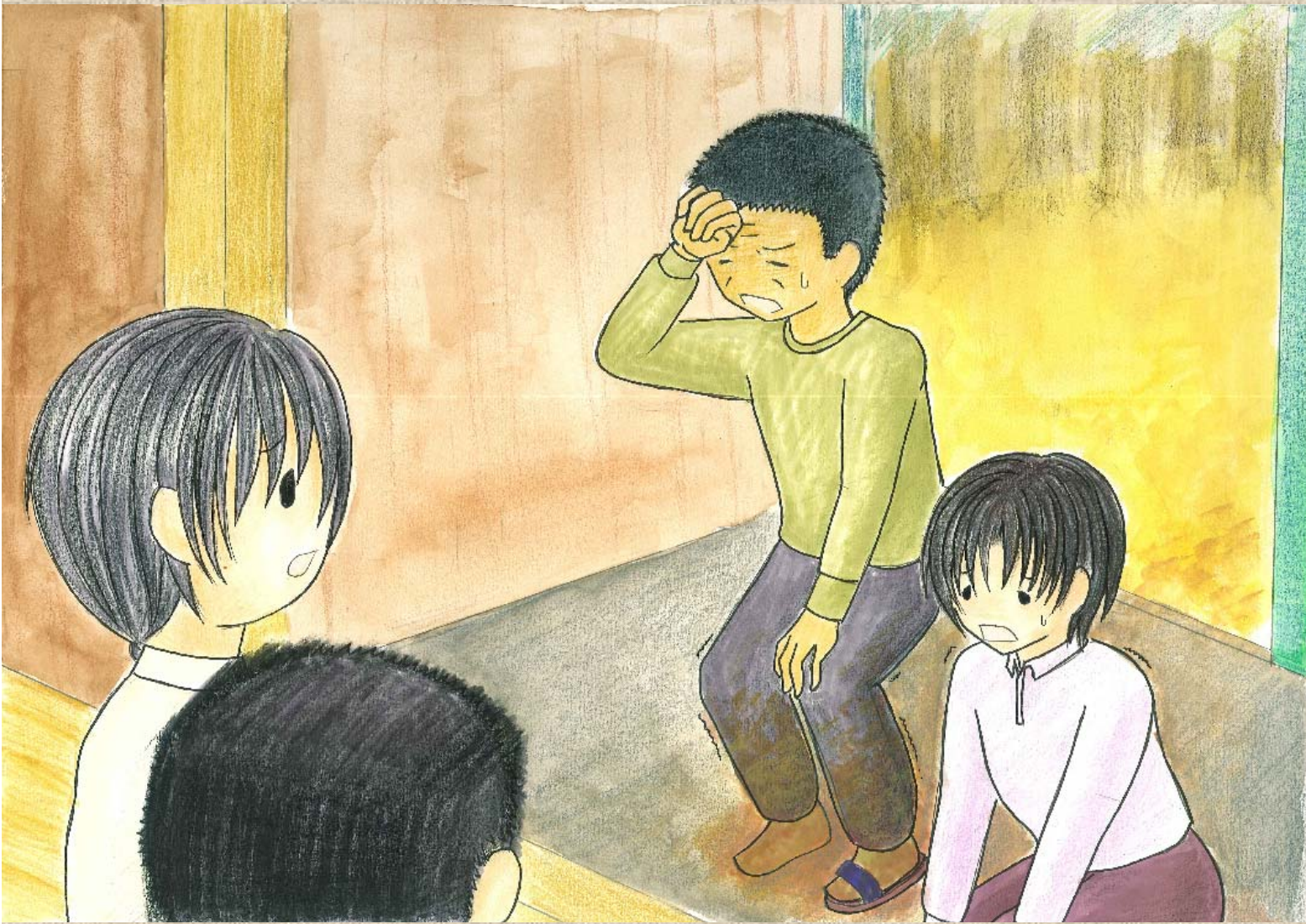
**中には、裸足の人、左右の履き物が違う人なども  
いました。**



山のふもとの方では、  
弟が言っていた通り、  
津波が街を襲っていました。

**ザーザー！！**

という、水が押し寄せる音と、  
人々の叫び声が、  
私達のいる山の上の方まで聞こえてきます。



最後に避難所にたどり着いた人たちの足元が、みんな海水に濡れていました。

“後ろから津波に追いかけられたんだよ。もう駄目かと思った。危なかったよ”

その言葉に、私も母も、恐ろしさで何も言うことができませんでした。

あの時、弟が避難を促してくれなければ、今頃、私達家族も津波にさらわれてしまっていたかもしれないのです。

地震の後は、すぐに高い場所へ避難することの大切さを身をもって体験した出来事でした。